

助け合って生活するために地域の^{ちいき}の一員としてどのようなことができるのでしょうか。

東日本大震災^{ひがしにほんだいしんさい}では、住む家を失ったり、ライフラインが止まったりしたために、宮城県^{みやぎけん}だけでも約32万人が避難所^{ひなんじょ}で生活をしなくてはならなくなりました。地域にある学校や体育館、公民館などが避難所となり、避難所での生活は、宮城県で最長9か月続いた人もいました。避難所では、そこに集まった人たちで生活のためのルールをつくり、助け合いながら生活しました。

知っ
て
おこ

避難所では、このような仕事がありました。



▲ 食事の配給

写真提供：南三陸 佐藤信一氏



▲ 掃除

写真提供：たがじょう見聞館



▲ 受付



▲ 物資の搬入

話
みよう

今までに学校や家庭で学んできたことや経験^{けいけん}してきたことが、きっと避難所での生活にも生かせることでしょう。

どのような場面で、どのような役割^{やくわり}を果たすことができるか話し合ってみましょう。

わたしにもできること

あの夜、私^{わたし}がお母さん^{かあさん}と小学校に避難^{ひなん}してきた時、そこにはたくさんの方がいた。後で聞いてみると、1500人くらい避難していたそうだ。朝になり、避難所になった体育館の中に、人が歩く通路をつくることになった。改めて体育館の中を見回してみると、いろいろな人がいた。おなかの大きなお母さん、生まれたばかりの赤ちゃん、足が不自由で一人では歩けない方、お年寄り、具合の悪そうな方。確かに私のように物をよけて歩いたり、「通して」と声をかけたりできる人ばかりではない。

「よし。通路をつくろう。」

みんな、立ち上がった。赤ちゃんのいるおうちの方は、ステージわきの小部屋^{せうぶつ}に。足の不自由な方は、トイレに近いところに。具合の悪い方は、すぐ連絡が取れるように本部の近くに。

通路をつくったことを機に、いろいろなことが少しずつ動き出した。

細かいルールも少しずつ決まり元気な人はトイレ掃除を始めた。PTAの方は、毎日ごはんを用意し配っている。6年生のお姉さんたちも手伝い始めた。

（みんな、自分にできることを精一杯やっている。わたしにも、できる

ことはないだろうか。）

まわりを見回してみた。交代でしか横になれないくらい人があふれている体育館。

となりの、体がしんどそうなおばあちゃん。一方で、騒がずにはられない小さな子ども。私にもできることが見つかった。

「おばあちゃん。こっちも使って横になっていいですよ。」

となりのおばあちゃんは、びっくりしたように私の顔を見た。そして笑顔になった。

「ありがとう。体がつらかったんだ。」

私も笑顔になった。

「お母さん、小さい子たちと、そこで遊んでいるからね。」

お母さんがびっくりした顔で見上げている。

（みんなと生きている。この地域^{ちいき}で生きている。みんなとがんばろう。）

そんな思いが自然にわきあがった。

（平成25年 はなむら特集号 ～伝えよう、明日の子供たちに～）

